

2 麦 類

(1) 要 旨

ア 小麦（子実用）

作付面積は23万1,800haで、前年産並みであった。

収穫量は102万9,000 t で、前年産に比べ6万5,000 t （6 %）減少した（表2－1、2－2）。

イ 二条大麦（子実用）

作付面積は4万100haで、前年産に比べ1,200ha（3 %）増加した。

収穫量は11万9,100 t で、前年産に比べ3万2,200 t （21 %）減少した（表2－1、2－2）。

ウ 六条大麦（子実用）

作付面積は1万9,500haで、前年産に比べ100ha（1 %）減少した。

収穫量は5万4,100 t で、前年産に比べ1万300 t （16 %）減少した（表2－1、2－2）。

エ はだか麦（子実用）

作付面積は5,430haで、前年産に比べ90ha（2 %）減少した。

収穫量は1万2,400 t で、前年産に比べ4,200 t （25 %）減少した（表2－1、2－2）。

表 2－1 令和 6 年産麦類（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量	収 穫 量			10a 当 たり 平均収量	10a 当 たり 平均収量
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比		対 比	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	%	kg
全 国											
小 麦	231,800	444	1,029,000	100	100	94	△ 65,000	94	98	455	
二条大麦	40,100	297	119,100	1,200	103	76	△ 32,200	79	80	372	
六条大麦	19,500	277	54,100	△ 100	99	84	△ 10,300	84	89	310	
はだか麦	5,430	228	12,400	△ 90	98	76	△ 4,200	75	76	299	
北 海 道											
小 麦	132,000	541	714,200	△ 300	100	100	△ 2,900	100	105	517	
二条大麦	1,680	402	6,750	△ 30	98	113	640	110	103	390	
六条大麦	20	421	84	6	143	96	22	135	115	367	
はだか麦	55	313	172	△ 14	80	125	△ 1	99	125	251	
都 府 県											
小 麦	99,800	315	314,700	300	100	83	△ 62,200	83	85	369	
二条大麦	38,400	293	112,400	1,200	103	75	△ 32,800	77	79	371	
六条大麦	19,500	277	54,000	△ 100	99	84	△ 10,400	84	89	311	
はだか麦	5,370	227	12,200	△ 80	99	75	△ 4,200	74	76	300	

注：1 子実用とは、主に食用に供すること（子実生産）を目的とするものをいう。

2 「（参考）10 a 当たり平均収量対比」とは、10 a 当たり平均収量（原則として前年産を起点とした過去 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年の平均値をいう。ただし、過去 7 か年全ての 10 a 当たり収量が確保できない場合は、6 か年又は 5 か年の最高及び最低を除いた平均とし、4 か年又は 3 か年の場合は、単純平均である。）に対する当年産の 10 a 当たり収量の比率である。なお、過去 7 か年のうち、3 か年分の 10 a 当たり収量が確保できない場合は、作成していない（以下各統計表において同じ。）。

表 2－2 令和 6 年産麦類（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全農地	国 業 城	小 麦				二 条 大 麦				六 条 大 麦				は だ か 麦			
		作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比
		ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%
全 国		231,800	444	1,029,000	98	40,100	297	119,100	80	19,500	277	54,100	89	5,430	228	12,400	76
北 海 道		132,000	541	714,200	105	1,680	402	6,750	103	20	421	84	115	55	313	172	125
都 府 県		99,800	315	314,700	85	38,400	293	112,400	79	19,500	277	54,000	89	5,370	227	12,200	76
東 北		6,810	292	19,900	115	47	340	160	130	1,660	342	5,680	100	x	x	x	nc
北 陸		607	260	1,580	123	2	150	3	100	10,700	282	30,200	92	x	x	x	x
関 東 ・ 東 山		21,400	374	80,100	104	11,800	352	41,500	95	4,450	231	10,300	76	342	270	923	94
東 海		18,000	333	59,900	84	x	182	x	102	x	190	x	70	x	217	x	80
近 畿		9,200	288	26,500	93	145	279	405	88	2,090	324	6,780	96	x	234	x	94
中 国		3,200	284	9,100	82	3,240	294	9,520	82	x	196	x	91	535	219	1,170	84
四 国		3,000	274	8,210	72	x	285	x	87	x	77	x	38	2,440	243	5,940	75
九 州		37,600	291	109,500	73	23,000	262	60,300	70	55	107	59	61	1,750	201	3,520	66
沖 縄		10	143	14	112	3	137	4	169	-	-	-	nc	-	-	-	nc

注：全国農業地域別（都府県を除く。）の 10 a 当たり平均収量は、各都府県の 10 a 当たり平均収量に当年産の作付面積を乗じて求めた収穫量（平均収穫量）を全国農業地域別に積み上げ、当年産の全国農業地域別作付面積で除して算出している（以下各統計表において同じ。）。

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

作付面積は23万1,800haで、前年産並みであった。

このうち、北海道は13万2,000ha、都府県は9万9,800haで、それぞれ前年産並みであった（表2-1、2-2、図2-1）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は444kgで、前年産を6%下回った。

これは、主に九州において、2月から4月まで多雨傾向で推移したことから湿害や病害の被害がみられたことに加え、4月以降の日照不足や高温により登熟が不良であったためである。

このうち、北海道は541kgで、前年産並みであった。

また、都府県は315kgで、前年産を17%下回った。

なお、10a当たり平均収量対比は98%となった（表2-1、2-2、図2-1）。

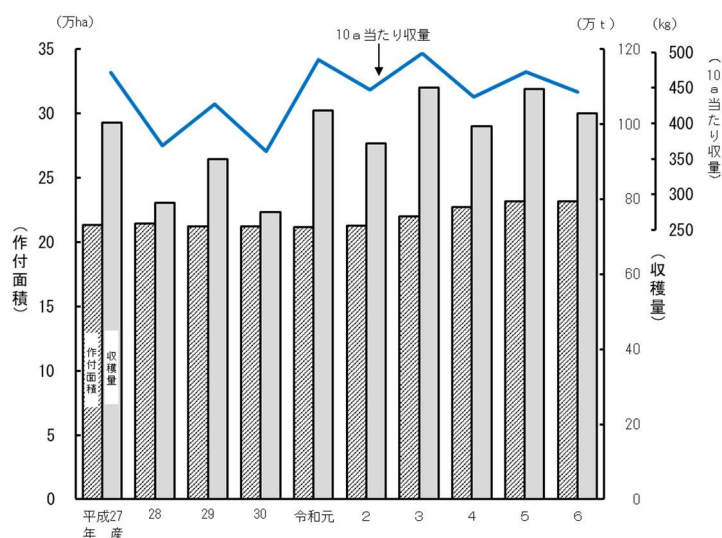
(ウ) 収穫量

収穫量は102万9,000tで、前年産に比べ6万5,000t（6%）減少した。

このうち、北海道は71万4,200tで、前年産並みであった。

また、都府県は31万4,700tで、前年産に比べ6万2,200t（17%）減少した（表2-1、2-2、図2-1）。

図2-1 小麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



イ 二条大麦（子実用）

（ア） 作付面積

作付面積は4万100haで、前年産に比べ1,200ha（3%）増加した。

これは、主に九州において、他作物からの転換等があったためである。

このうち、北海道は1,680haで、前年産に比べ30ha（2%）減少した。

また、都府県は3万8,400haで、前年産に比べ1,200ha（3%）増加した（表2-1、2-2、図2-2）。

（イ） 10a 当たり収量

10a 当たり収量は297kgで、前年産を24%下回った。

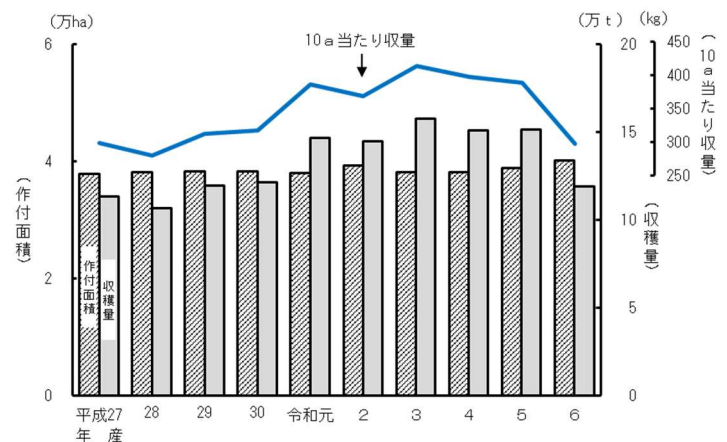
これは、主に九州において、2月から4月まで多雨傾向で推移したことから湿害や病害の被害がみられたことに加え、4月以降の日照不足や高温により登熟が不良であったためである。

なお、10a 当たり平均収量対比は80%となった（表2-1、2-2、図2-2）。

（ウ） 収穫量

収穫量は11万9,100tで、前年産に比べ3万2,200t（21%）減少した（表2-1、2-2、図2-2）。

図2-2 二条大麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



（イ） 10a 当たり収量

10a 当たり収量は297kgで、前年産を24%下回った。

これは、主に九州において、2月から4月まで多雨傾向で推移したことから湿害や病害の被害がみられたことに加え、4月以降の日照不足や高温により登熟が不良であったためである。

なお、10a 当たり平均収量対比は80%となった（表2-1、2-2、図2-2）。

（ウ） 収穫量

収穫量は11万9,100tで、前年産に比べ3万2,200t（21%）減少した（表2-1、2-2、図2-2）。

ウ 六条大麦（子実用）

（ア） 作付面積

作付面積は1万9,500haで、前年産に比べ100ha（1%）減少した（表2-1、2-2、図2-3）。

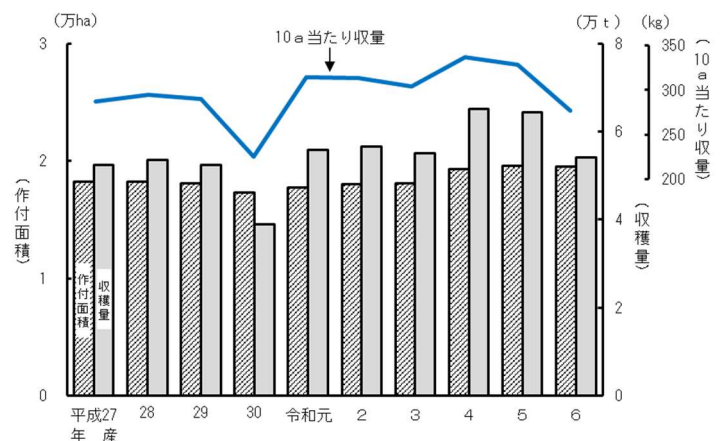
（イ） 10a 当たり収量

10a 当たり収量は277kgで、前年産を16%下回った。

これは、主に北陸において、播種期の降雨により湿害が発生し、初期生育が悪かったためである。

なお、10a 当たり平均収量対比は89%となった（表2-1、2-2、図2-3）。

図2-3 六条大麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



（ウ） 収穫量

収穫量は5万4,100tで、前年産に比べ1万300t（16%）減少した（表2-1、2-2、図2-3）。

エ はだか麦（子実用）

(ア) 作付面積

作付面積は5,430haで、前年産に比べ90ha（2％）減少した（表2－1、2－2、図2－4）。

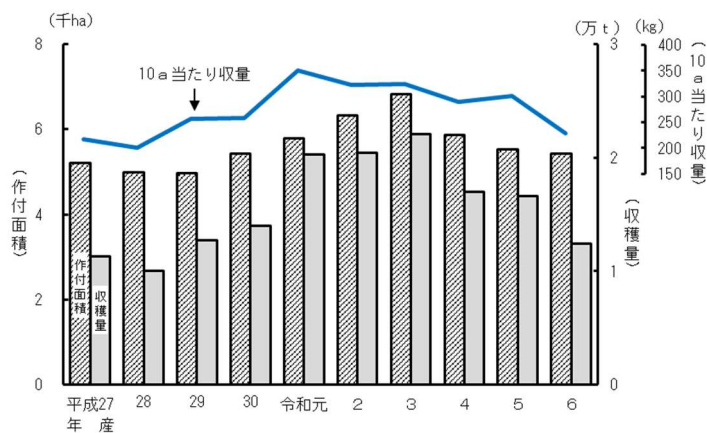
(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は228kgで、前年産を24％下回った。

これは、出穂後の日照不足及び断続的な降雨により湿害等が発生したためである。

なお、10a当たり平均収量対

図2－4 はだか麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



比は76％となった（表2－1、2－2、図2－

(ウ) 収穫量

収穫量は1万2,400tで、前年産に比べ4,200t（25％）減少した（表2－1、2－2、図2－4）。

3 豆類・そば

(1) 要 旨

豆類（乾燥子実）の収穫量は、大豆が25万2,400 t で、前年産に比べ8,400 t （3％）減少した。小豆は4万6,700 t で、前年産に比べ1万5,800 t （51％）増加した。いんげんは5,650 t で、前年産に比べ470 t （9％）増加した。らっかせいは1万4,800 t で、前年産に比べ900 t （6％）減少した。

また、そば（乾燥子実）の収穫量は4万400 t で、前年産に比べ4,800 t （13％）増加した（表3）。

表3 令和6年産豆類（乾燥子実）及びそば（乾燥子実）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量	収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対	10 a 当たり 平均収量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
大 豆	153,900	164	252,400	△ 800	99	97	△ 8,400	97	102	161	
小 豆	24,000	195	46,700	△ 800	97	156	15,800	151	101	193	
うち北海道	20,800	218	45,300	△ 100	100	157	16,200	156	99	220	
い ん げ ん	5,650	100	5,650	△ 220	96	114	470	109	76	131	
うち北海道	5,270	102	5,380	△ 180	97	113	470	110	76	134	
ら っ か せ い	5,560	266	14,800	△ 150	97	97	△ 900	94	109	244	
う ち 千 葉	4,590	278	12,800	△ 90	98	97	△ 600	96	110	252	
そ ば	69,000	59	40,400	1,900	103	111	4,800	113	100	59	

注： 小豆、いんげん及びらっかせいの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。令和6年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに全国調査を実施した。

(2) 解 説

ア 大豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

作付面積は15万3,900haで、前年産に比べ800ha（1％）減少した（表3、図3－1）。

(イ) 10 a 当たり収量

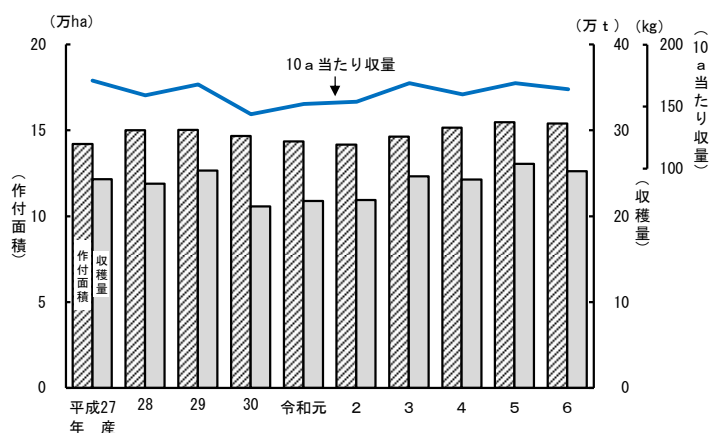
10 a 当たり収量は164kgで、前年産を3％下回った。

なお、10 a 当たり平均収量対比は102％となった（表3、図3－1）。

(ウ) 収穫量

収穫量は25万2,400 t で、前年産に比べ8,400 t （3％）減少した（表3、図3－1）。

図3－1 大豆（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



イ 小豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

作付面積は2万4,000haで、前年産に比べ800ha（3％）減少した（表3、図3－2）。

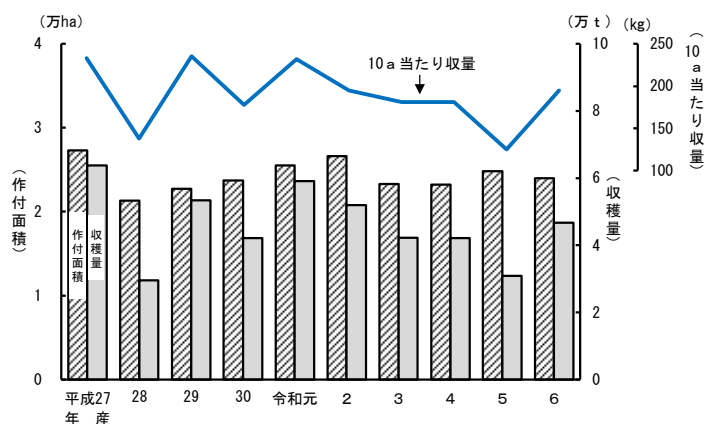
(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は195kgで、前年産を56％上回った。

これは、主産地である北海道において、登熟期から収穫期にかけての降雨により作柄が悪かった前年産を上回ったためである。

なお、10 a 当たり平均収量対比は101％となった（表3、図3－2）。

図3－2 小豆（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は4万6,700 t で、前年産に比べ1万5,800 t （51％）増加した（表3、図3－2）。

ウ いんげん（乾燥子実）

(ア) 作付面積

作付面積は5,650haで、前年産に比べ220ha（4％）減少した（表3、図3-3）。

(イ) 10a当たり収量

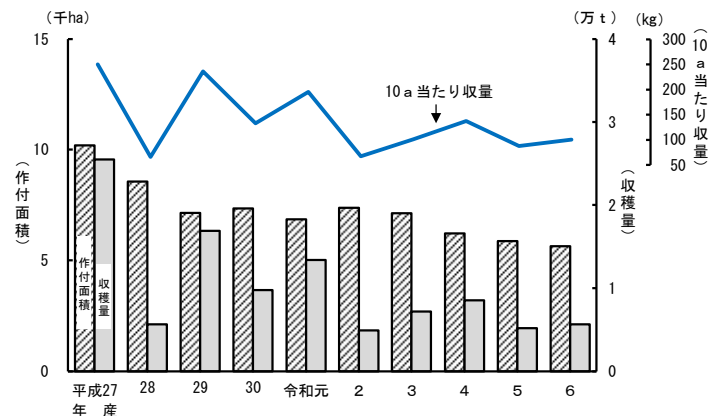
10a当たり収量は100kgで、前年産を14％上回ったが、10a当たり平均収量対比は76％となった。

これは、主産地である北海道において、作柄が悪かった前年産を上回ったものの、6月から7月にかけて干ばつ・高温、収穫期前の降雨等の影響により、品質が低下したためである（表3、図3-3）。

(ウ) 収穫量

収穫量は5,650tで、前年産に比べ470t（9％）増加した（表3、図3-3）。

図3-3 いんげん（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



エ らっかせい（乾燥子実）

(ア) 作付面積

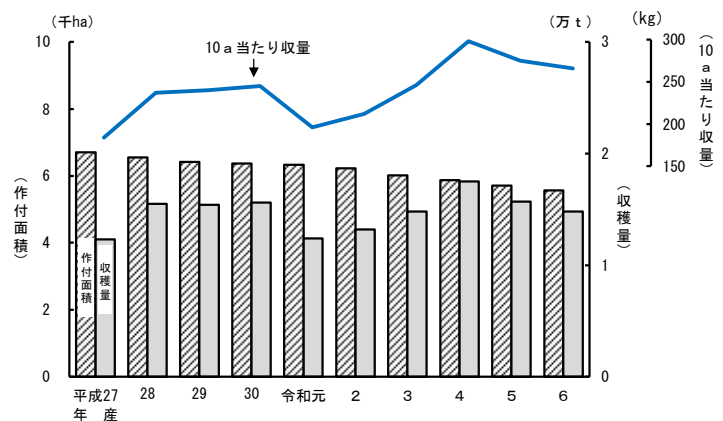
作付面積は5,560haで、前年産に比べ150ha（3％）減少した（表3、図3-4）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は266kgで、前年産を3％下回った。

なお、10a当たり平均収量対比は109％となった（表3、図3-4）。

図3-4 らっかせい（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は1万4,800tで、前年産に比べ900t（6％）減少した（表3、図3-4）。

オ そば（乾燥子実）

（ア） 作付面積

作付面積は6万9,000haで、前年産に比べ1,900ha（3%）増加した（表3、図3-5）。

（イ） 10a当たり収量

10a当たり収量は59kgで、前年産を11%上回った。

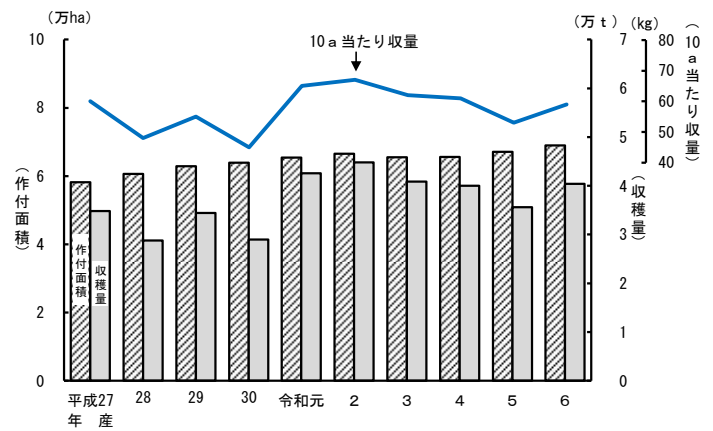
これは、北海道等において、夏場の高温の影響等により作柄が悪かった前年産を上回ったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は100%となった（表3、図3-5）。

（ウ） 収穫量

収穫量は4万400tで、前年産に比べ4,800t（13%）増加した（表3、図3-5）。

図3-5 そば（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



4 かんしょ

(1) 作付面積

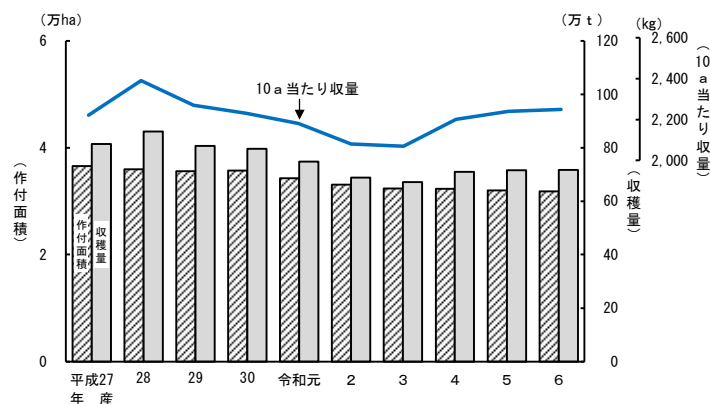
作付面積は3万1,800haで、前年産に比べ200ha（1％）減少した（表4、図4）。

(2) 10a当たり収量

10a当たり収量は2,250kgで、前年産並みとなった。

なお、10a当たり平均収量対比は103％となった（表4、図4）。

図4 かんしょの作付面積、収量及び10a当たり収量の推移（全国）



(3) 収穫量

収穫量は71万7,000tで、前年産並みとなった（表4、図4）。

表4 令和6年産かんしょの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量	収 穫 量			10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平 均 収 量
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
全 国	31,800	2,250	717,000	△ 200	99	100	1,200	100		103	2,190
うち 茨 城	7,810	2,550	199,200	80	101	98	△ 1,000	100		98	2,590
千 葉	3,400	2,450	83,300	△ 140	96	95	△ 8,000	91		103	2,390
徳 島	1,070	2,430	26,000	△ 10	99	97	△ 1,100	96		97	2,510
熊 本	810	2,250	18,200	△ 12	99	100	△ 200	99		100	2,240
宮 崎	3,180	2,430	77,300	170	106	106	8,400	112		101	2,400
鹿 児 島	9,490	2,300	218,300	△ 300	97	105	2,900	101		106	2,180

注： かんしょの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県をいう。令和6年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

5 飼料作物

(1) 牧草

ア 作付（栽培）面積

作付（栽培）面積は69万5,500haで、前年産に比べ9,700ha（1％）減少した（表5－1、図5－1）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は3,470kgで、前年産を2％上回った。

なお、10a当たり平均収量対比は101％となった（表5－1、図5－1）。

ウ 収穫量

収穫量は2,414万8,000tで、前年産に比べ17万6,000t（1％）増加した（表5－1、図5－1）。

図5－1 牧草の作付（栽培）面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

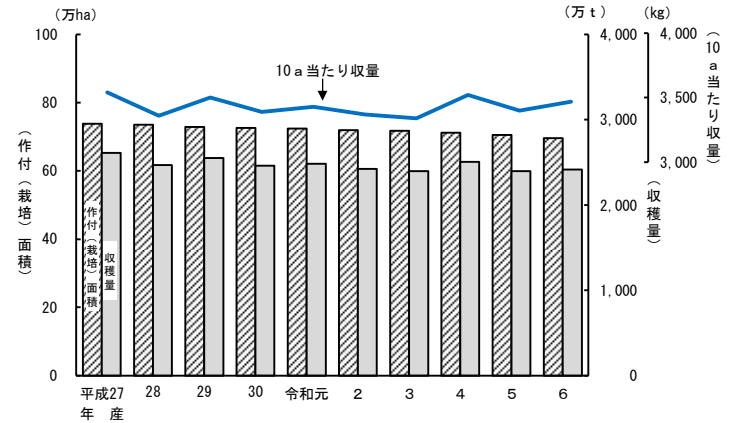


表5－1 令和6年産牧草の作付（栽培）面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付(栽培) 面 積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 (栽 培) 面 積		10 a 当たり 収 量	収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量	
				対 差	対比		対比	対 差			対比
全 国	ha 695,500	kg 3,470	t 24,148,000	ha △ 9,700	% 99	% 102	t 176,000	% 101	% 101	kg 3,420	
う ち 北 海 道	515,600	3,340	17,221,000	△ 6,700	99	103	246,000	101	102	3,260	

注： 牧草の作付（栽培）面積調査及び収穫量調査は、作付（栽培）面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県及び農業競争力基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県をいう。令和6年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) 青刈りとうもろこし

ア 作付面積

作付面積は9万6,500haで、前年産に比べ700ha（1％）減少した（表5－2、図5－2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は5,150kgで、前年産を1％上回った。

なお、10a当たり平均収量対比は102％となった（表5－2、図5－2）。

ウ 収穫量

収穫量は497万2,000tで、前年産に比べ3万2,000t（1％）増加した（表5－2、図5－2）。

図5－2 青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

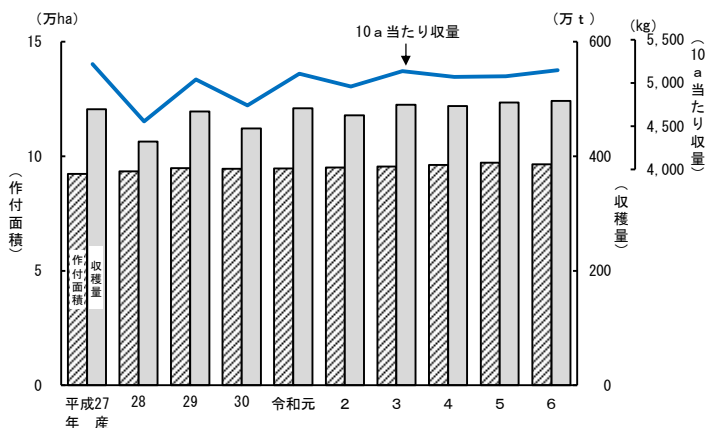


表5－2 令和6年産青刈りとうもろこしの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量	収 穫 量			10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平 均 収 量
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
全 国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
	96,500	5,150	4,972,000	△ 700	99	101	32,000	101		102	5,050
う ち 北 海 道	60,400	5,560	3,358,000	0	100	101	42,000	101		103	5,420

注：青刈りとうもろこしの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県及び農業競争力基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県をいう。令和6年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(3) ソルゴー

ア 作付面積

作付面積は1万1,000haで、前年産に比べ700ha（6％）減少した（表5－3、図5－3）。

これは、他作物への転換等があったためである。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は3,940kgで、前年産を7％下回った。

これは、主に九州の一部地域において、高温及び少雨の影響による発芽不良や生育不良がみられたためである。

なお、10a当たり平均収量対比は92％となった（表5－3、図5－3）。

ウ 収穫量

収穫量は43万3,300tで、前年産に比べ6万3,900t（13％）減少した（表5－3、図5－3）。

図5－3 ソルゴーの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

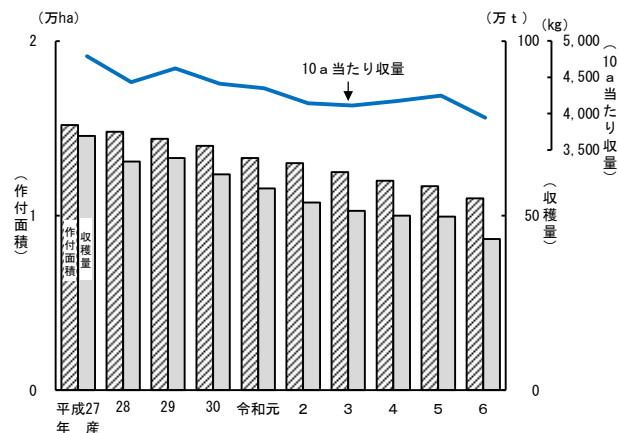


表5－3 令和6年産ソルゴーの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量	収 穫 量		対 比	10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
全 国	ha 11,000	kg 3,940	t 433,300	ha △ 700	% 94	% 93	t △ 63,900	% 87		% 92	kg 4,260

注： ソルゴーの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあっては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県及び農業競争力基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県をいう。令和6年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

6 工芸農作物

(1) 茶

ア 栽培面積

全国の栽培面積は3万5,100haで、前年に比べ900ha（2％）減少した（表6－1）。

イ 摘採実面積

主産県の摘採実面積は2万6,700haで、前年産に比べ500ha（2％）減少した（表6－2）。

ウ 生葉収穫量

主産県の生葉収穫量は31万9,300tで、前年産並みとなった（表6－2）。

エ 荒茶生産量

主産県の荒茶生産量は6万6,900tで、前年産に比べ1,100t（2％）減少した。

府県別にみると、鹿児島県が2万7,000t（主産県計に占める割合は40％）、次いで静岡県が2万5,800t（同39％）、三重県が5,020t（同8％）となっている（表6－2、図6－1）。

表6－1 茶の栽培面積（全国）

単位：ha

区 分	栽 培 面 積
令和5年	36,000
6	35,100
対前年比（％）	98

注：茶の栽培面積調査については、6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年については、主産県調査を実施している。令和5年及び6年調査については主産県を対象に調査を実施した。なお、主産県は、埼玉県、静岡県、三重県、京都府、福岡県、熊本県、宮崎県及び鹿児島県の8府県である（以下表6－2まで同じ。）。なお、全国値は主産県の調査結果から推計したものである。

図6－1 茶の府県別荒茶生産量及び割合（主産県）

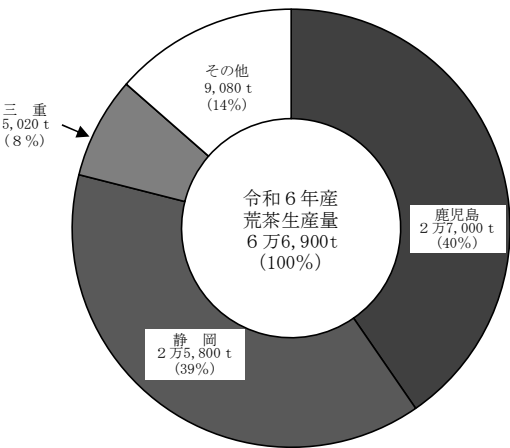


表6－2 令和6年産茶の摘採面積、10a当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

区 分	摘 採 面 積		10 a 当 たり 生 葉 収 量		生 葉 収 穫 量		荒 茶 生 産 量	
	実 面 積	延 べ 面 積	一 番 茶		一 番 茶		一 番 茶	
	ha	ha	kg	kg	t	t	t	t
主産県計 令和5年産	27,200	69,400	1,180	440	320,000	119,300	68,000	23,500
6	26,700	65,700	1,200	484	319,300	129,100	66,900	24,900
対前年産比（％）	98	95	102	110	100	108	98	106

注：茶の収穫量調査は、6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年については、主産県調査を実施している。令和6年産調査については主産県を対象に調査を実施した。

(2) なたね（子実用）

ア 作付面積

作付面積は1,680haで、前年産に比べ60ha（3％）減少した（表6－3、図6－2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は187kgで、前年産を11％下回った。

これは、主に北海道において、天候不順による影響がみられたためである。

なお、10a当たり平均収量対比は94％となった（表6－3、図6－2）。

ウ 収穫量

収穫量は3,140tで、前年産に比べ540t（15％）減少した（表6－3、図6－2）。

図6－2 なたね（子実用）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

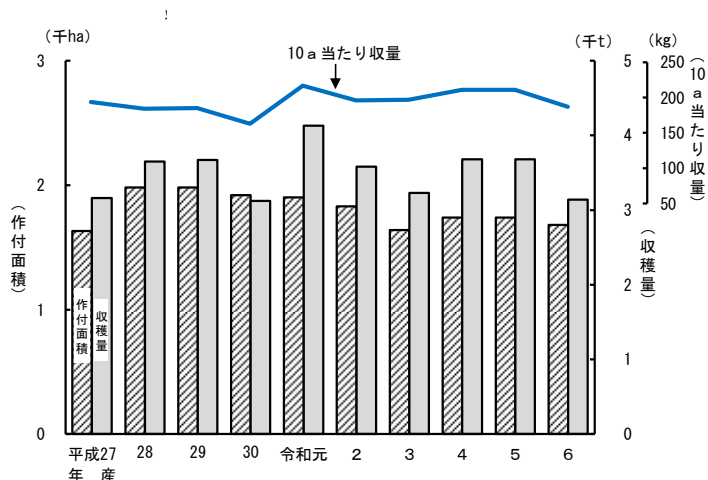


表6－3 令和6年産なたね（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量	収 穫 量			10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平 均 収 量
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%		%	kg
全 国	1,680	187	3,140	△ 60	97	89	△ 540	85		94	200

(3) てんさい（北海道）

ア 作付面積

作付面積は4万8,900haで、前年産に比べ2,300ha（4％）減少した（表6－4、図6－3）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は7,130kgで、前年産を7％上回った。

これは、おおむね天候に恵まれ、生育が順調に推移したためである。

なお、10a当たり平均収量対比は106％となった（表6－4、図6－3）。

ウ 収穫量

収穫量は348万5,000tで、前年産に比べ8万2,000t（2％）増加した（表6－4、図6－3）。

図6－3 てんさいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（北海道）

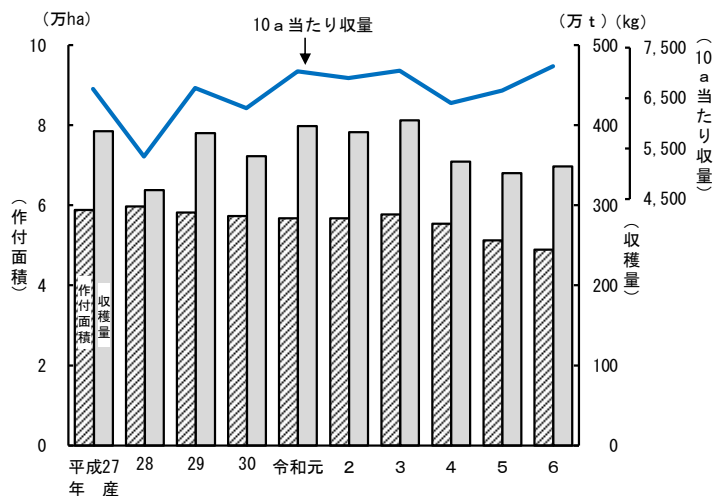


表6－4 令和6年産てんさいの作付面積、10a当たり収量及び収穫量（北海道）

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較					(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収	収 穫 量		10 a 当 たり 平均収量 対 比	10 a 当 たり 平均収量
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg
北 海 道	48,900	7,130	3,485,000	△ 2,300	96	107	82,000	102	106	6,730

注：てんさいの作付面積調査及び収穫量調査は、北海道を対象に実施した。

(4) さとうきび

ア 収穫面積

収穫面積は2万3,100haで、前年産に比べ400ha（2％）増加した（表6－5、図6－4）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は6,080kgで、前年産を17％上回った。

これは、おおむね天候に恵まれて生育が順調であり、台風や少雨の影響があった前年産を上回ったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は111％となった（表6－5、図6－4）。

ウ 収穫量

収穫量は140万5,000tで、前年産に比べ22万3,000t（19％）増加した（表6－5、図6－4）。

図6－4 さとうきびの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移

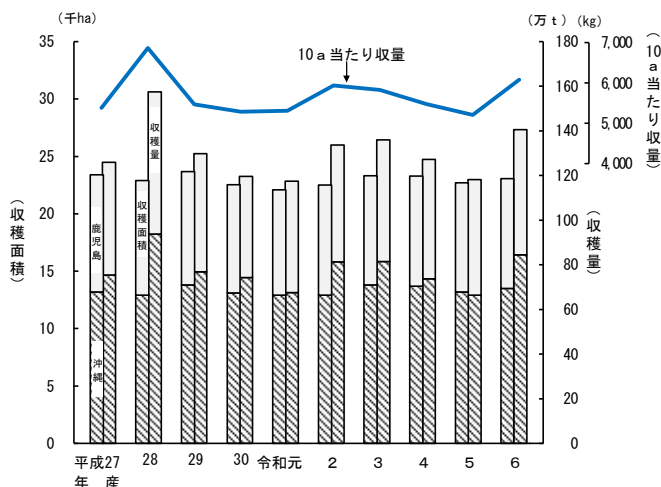


表6－5 令和6年産さとうきびの栽培面積、作型別収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	栽培面積	収 穫 面 積				10 a 当 た り 収 量			
		計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し	計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し
	ha	ha	ha	ha	ha	kg	kg	kg	kg
全 国	27,100	23,100	4,000	2,660	16,400	6,080	7,970	5,510	5,730
鹿 児 島	10,600	9,570	953	1,450	7,170	5,850	7,510	5,460	5,700
沖 縄	16,500	13,500	3,050	1,210	9,220	6,260	8,100	5,560	5,760

区 分	収 穫 量				前 年 産 と の 比 較				(参 考)	
	計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し	栽培面積	収穫面積	10a当たり収量	収穫量	10a当たり平均収量対比	10a当たり平均収量
	t	t	t	t	%	%	%	%	%	kg
全 国	1,405,000	318,600	146,500	939,500	99	102	117	119	111	5,480
鹿 児 島	559,500	71,600	79,200	408,700	99	101	108	108	107	5,450
沖 縄	845,200	247,000	67,300	530,800	99	102	124	127	113	5,560

注：さとうきびの収穫面積調査及び収穫量調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に実施した。

(5) こんにゃくいも

ア 栽培面積・収穫面積

栽培面積は2,910haで、前年産に比べ320ha（10％）減少した。

これは、主に群馬県において、他作物への転換等があったためである。

また、収穫面積は1,870haで、前年産に比べ80ha（4％）減少した（表6－6、図6－5）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は2,750kgで、前年産を5％上回った。

なお、10a当たり平均収量対比は104％となった（表6－6、図6－5）。

ウ 収穫量

収穫量は5万1,400tで、前年産に比べ500t（1％）増加した（表6－6、図6－5）。

図6－5 こんにゃくいもの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

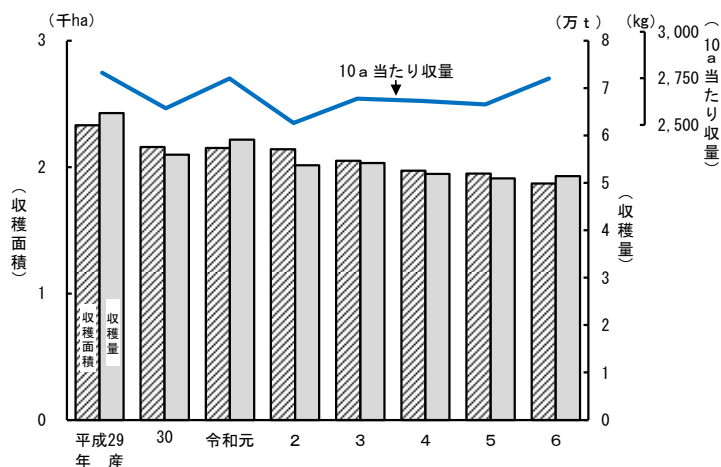


表6－6 令和6年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	栽培面積	収穫面積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較								(参 考)	
					栽 培 面 積		収 穫 面 積		10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量		10 a 当 たり 平均収量 対 比	10 a 当 たり 平均収量	
					対 差	対 比	対 差	対 比		対 比	対 差			対 比
	ha	ha	kg	t	ha	%	ha	%	%	t	%	%	kg	
全 国	2,910	1,870	2,750	51,400	△ 320	90	△ 80	96	105	500	101	104	2,640	
う ち 群 馬	2,690	1,750	2,840	49,700	△ 300	90	△ 60	97	106	1,200	102	103	2,750	

注： こんにゃくいもの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、群馬県を対象に調査を実施している。令和6年産調査については、全国を対象に調査を実施した。

(6) い（熊本県）

ア 作付面積

作付面積は319haで、前年産に比べ32ha（9％）減少した。

これは、高齢化による労力不足等に伴う作付中止のほか、他作物への転換があったためである（表6－7、図6－6）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は1,560kgで、前年産を1％上回った。

なお、10a当たり平均収量対比は105％となった（表6－7、図6－6）。

ウ 収穫量

収穫量は4,980tで、前年産に比べ460t（8％）減少した（表6－7、図6－6）。

エ い生産農家数、畳表生産農家数及び畳表生産量

「い」の生産農家数は266戸で、前年産に比べ30戸（10％）減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は264戸で、前年に比べ30戸（10％）減少した。

なお、令和5年7月から令和6年6月までの畳表生産量は141万枚で、前年に比べ13万枚（8％）減少した（表6－7）。

図6－6 「い」の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（熊本県）

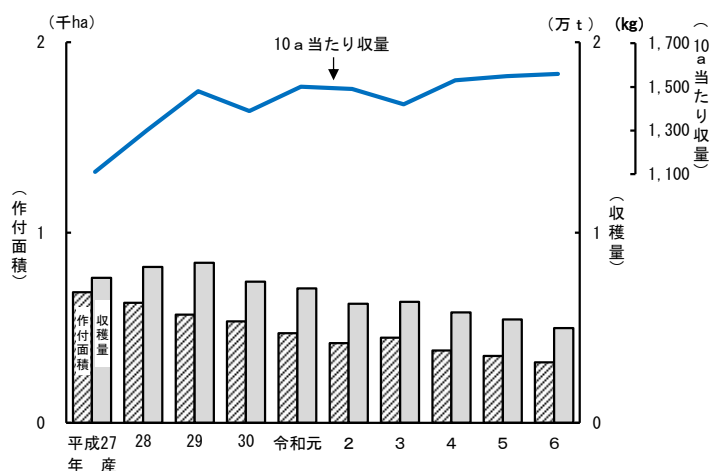


表6－7 令和6年産「い」の作付面積、10a当たり収量、収穫量等（熊本県）

区 分	い 生 産 農 家 数	作付面積	10 a 当 た り 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較					(参 考)		畳表生産 農 家 数	畳 表 生 産 量
					作 付 面 積		10 a 当 た り 収 量	収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量		
					対 差	対 比	対 比	対 差	対 比				
	戸	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	戸	千枚
熊 本	266	319	1,560	4,980	△ 32	91	101	△ 460	92	105	1,480	264	1,410

注：1 「い」の調査は、熊本県を対象に実施した。

2 い生産農家数は、令和6年産の「い」の生産を行った農家の数である。

3 畳表生産農家数は、「い」の生産から畳表の生産まで一貫して行っている農家で、令和5年7月から令和6年6月までに畳表の生産を行った農家の数である。

4 畳表生産量は、畳表生産農家によって令和5年7月から令和6年6月までに生産されたものである。